

自動機の導入で生産向上 新たなデザインのふくさ開発へ

事業内容

国産にこだわったふくさを製造販売

ふくさの製造・販売を手がけ、売り上げの95%以上をふくさ事業が占める。国産にこだわり、生地は全て自社で仕入れ、縫製などは職人の手作業で行っている。

昭和53年に、現社長の大山完一氏が大阪府八尾市で創業し、キーホルダーなど観光物産商品の製造卸や、巾着などの布製品も製造していた。大手フォーマルバックメーカーのふくさを取り扱い始めたことをきっかけに、ふくさのOEM(相手先ブランド)生産が主力事業となっていく。

オリジナルブランドの展開を開始

近年はOEM生産だけでなく、自社製品の製造販売にも注力し、下請け企業からの脱却を目指している。平成27年にはオリジナルブランド「スタイルふくさ」を立ち上げた。若者をメーンターゲットとし、従来のイメージを覆す新しいふくさの開発に取り組んでいる。

有限会社 大一創芸

代表取締役 大山 完一

〒581-0815 大阪府八尾市宮町4-3-30

TEL. 072-999-6414 FAX. 072-997-5481

資本金/8,000千円 従業員/8名

主な取引先/フォーマル系バックメーカー、文具店、雑貨店、仏壇仏具店、ギフトカタログなど

主な保有設備/自動延反機1台、自動裁断機1台、業務用ミシン11台、油圧押機1台、自動転写プレス機1台など

主力製品/ふくさ及び布製品全般

短納期 OK 企画力 OK 小ロット OK オナーの技術 OK 生産 OK 試作 OK 連携力 OK

日本の伝統文化「ふくさ」を守り、 新たな挑戦を続ける

代表取締役 大山 完一

創業40年、ふくさ製造20年の専門的なノウハウを生かし、日本の伝統的な文化であるふくさをあらゆる世代の方に伝えていくお手伝いをしながら、新たな挑戦を続けていきたいと考えております。



補助事業

自動機を導入 CADシステム、スキャナも

平成28年の「ものづくり補助金」で新たに4つの設備を導入した。丸めた状態で保管する生地を延ばし重ねる自動延反機、生地を裁断する自動裁断機、デザイン設計を行うCADシステム、生地型などをスキャンするスキャナ。

繊維業では、布の型抜きがリードタイム・コスト・品質に最も大きな影響を及ぼす。布の型抜きには熟練の技能が必要なため、単なる人員増加では生産能力拡大は難しい。これらの課題を解決するには、製造工程において自動延反機と自動裁断機を導入することが効果的と判断した。

従来の加工法の弱点を克服

また従来、生地の裁断に使用する鉄製の抜き型では、直線的な裁断しかできず、形状・機能に制約があった。スキャナを導入することで手切り型からでもデザイン設計ができる。CADシステムと組み合わせることでデザイン性・生産効率の向上につなげた。



導入した自動延反・裁断機ライン



「スタイルふくさ」製品



自動裁断機で切断した生地

具体的成果

作業時間削減で生産性向上 製造コスト削減も実現

自動延反機を導入するまでは、厚さに応じて生地を複数枚重ねる作業を手作業で行っていた。延反作業は、生地をしわ無くきっちり重ねなくてはならず、生地によっては複数名で作業することもあり、時間がかかる作業だ。また裁断に関しては1つのふくさを作る際に4〜5個の抜き型が必要で、抜き型の選別にも時間を要する。自動機を導入したことで複数名必要だった自動延反機・裁断機のラインは、1名で作業できるようになった。機械化によって作業時間が短縮でき、ふくさの生産能力は月に1万5,000個から、2万5,000個にまで向上した。抜き型の選択ミスによる材料のロスを抑えられたことで、本体の製造コストを9%減らすことができた。

スムーズな試作で製品開発が活発化

1番の成果は、試作がスムーズに出来るようになったことだ。自動裁断機の導入で抜き型の製造が不要になり、調整が必要な場合も新たな抜き型を作り直す工程が必要ない。また、通常直線的な裁断しかできない抜き型よりも、自動裁断機は自由な設計が可能。CADシステムで設計するため、保存した設計データからの微調整も容易だ。試作へのハードルが下がり、製品開発もより活発にできるようになった。

今後の戦略

営業活動強化 新たな販路開拓も

現在ふくさは文具店や雑貨店などさまざまな店舗で販売されている。新しい購買層獲得のため、結婚式に参列する機会の多い若い世代(20〜40代)をターゲットにした営業活動を展開する。文具店などに加え仏壇仏具、プライダルの専門店の販路開拓も目指している。フォーマルスーツ店に対しては、新社会人向けに関連販売の提案を想定。大学などの教育機関には、卒業記念品としてオリジナルのふくさを提案している。

高付加価値製品への取り組みを展開

自動延反機・自動裁断機などの導入で生産効率が上がったことで、カスタマイズ品などにもさらに対応できるようになり、高付加価値製品への取り組みが加速している。さらに平成29年度の「ものづくり補助金」では刺繍機を導入。校章や家紋などを施すオーダーメイド品への対応にも磨きをかけている。

自動機の導入で極端に言えば、丸や星形の形なども裁断できるようになったという。生地を自由な形に裁断できる技術を生かし、コインケースやブックカバーなどふくさ以外の製品にも積極的に取り組んでいく考えだ。

取材を終えて

新しいスタイルに 挑戦してこそ伝統が続く

過去からの伝統に目を向けつつも、しっかり未来を見据えた同社の姿勢が印象的だった。日本の伝統品であるふくさだが、歴史に甘んじず新たなチャレンジを続けることで伝統は続いていくのだと感じた。オリジナルブランド「スタイルふくさ」は一目見て思わず心躍るようなかわいさがある。オーダーメイドの受注生産など高収益事業への展開も加速する同社。ふくさととも発展し続ける同社の躍進に期待したい。

<https://hukusa.co.jp/>